

日本経営学会第99回大会 統一論題趣意書

統一論題 「経営学のこれまでとこれから」

サブテーマ1 経営と人間

サブテーマ2 経営と技術

サブテーマ3 経営学研究の評価

この度、西南学院大学が日本経営学会第99回大会を2025年9月2日(火)～5日(金)に開催させていただくことになりました。同学会の全国大会を九州地区で開催するのは、2015年に熊本学園大学で開催された第89回大会以来、実に10年ぶりとなります。本学は学芸学部単一学部からなる新制大学として1949年に開設され、現在は人文・社会科学系の7学部12学科、大学院7研究科を備える総合大学として発展しております。その本学が伝統ある日本経営学会の全国大会を開学以来、76年の歳月を経て初めて開催させていただくことは、この上ない喜びであります。加えて、本学の商学部は2024年に設立70周年を迎えますので、その記念事業としても開催させていただきたく存じます。開催校として精一杯準備してまいりますので、どうぞよろしく願いいたします。

(1)統一論題を「経営学のこれまでとこれから」に設定した理由

本学は、その第99回大会を開催するにあたり、「経営学のこれまでとこれから」を統一論題としてご提案したいと思っております。日本経営学会は1926年に第1回大会を開催し、2026年には第100回の記念大会を開催しようとしております。第99回大会はその第100回大会に向けて、経営学のこれまでをふりかえるとともに、これからを展望して第100回大会へと引き継いでいく役割を果たしてまいりたいと存じます。

経営学に限らず、学術研究を発展させるためには、「温故知新」の精神が基本になることは言をまちません。これまでの研究成果を振り返りながら現在の到達地点を確認し、そこから社会の変化を展望して新しい研究成果を生み出していく過程は、これまでも、そしてこれからも不変の研究営為であり続けることでしょう。第99回大会もその温故知新の精神を基底に据えながら、「経営学のこれまでとこれから」を統一論題と設定し、経営学の着実な発展を模索してまいりたいと思っております。

(2)サブテーマの設定の理由

第99回大会では、このように着実性を意識した統一論題を設定しつつも、その統一論題のもとで展開される各サブテーマについては、発展性を意識して設定したいと思っております。サブテーマとしては、「経営と人間」、「経営と技術」、「経営学研究の評価」の3つをご提案したいと思っております。

まずサブテーマ1では、経営と人間の間をめぐる経営学研究のこれまでとこれからを展

望したいと思います。経営を定義することは決して容易ではありませんが、複数の人間が協働して新しい価値を社会に生み出す営為であることには大方の同意を得られることでしょう。経営と人間の関係を考察することは、経営学の重要な研究対象であり続けてきました。ひるがえって日本の経営環境に目を向けると、約30年間続いたデフレーションの終焉、少子高齢化にともなう生産年齢人口の減少など、人間の価値がカネに対して相対的に高まり、「ウェルビーイング」、「健康経営」、「ジョブ・クラフティング」などの人間を重視する経営の思想が広まりつつあります。サブテーマ1では、このような経営と人間の関係をめぐる経営学研究的のこれまでとこれからについて議論を深めたいと思います。

次にサブテーマ2では、経営と技術の関係をめぐる経営学研究的のこれまでとこれからを展望したいと思います。技術が経営において重要な役割を果たしてきたことは、いうまでもありません。経営学では、古くは科学的管理法を初め、JIT、CAD、CAM、CIM、POSシステム、FMSなど、経営と多くの技術との関係が研究されてきました。とりわけ近年では、ビッグデータ解析や生成系AIなどの新しい技術を取り込んだ経営の研究が盛んになっております。サブテーマ2では、このような経営と技術の関係をめぐる経営学研究的のこれまでとこれからについて議論を深めたいと思います。

最後にサブテーマ3では、経営学研究的の評価に関するこれまでとこれからを展望したいと思います。サブテーマ1と2は経営学の中身の話であるのにたいして、サブテーマ3は経営学の外側の話であることが少し違うところかもしれません。しかし、このサブテーマ3は、経営学者の育成とも密接に関連しており、経営学研究的の盛衰にも大きな影響を与える重要なテーマの1つであると考えております。ここ数年、経営学研究的の評価が日本の学会において強烈に揺らいでいるように思います。理論対実証、定性対定量、日本語学会誌対国際誌、書籍対論文などの評価基準をめぐって、世代間でも、研究者間でも大きな論争が生じております。とりわけこれから研究職に就こうとする若手研究者は、複数の評価基準に対応することを余儀なくされており、負担が大きくなっております。良い研究とは何か、研究成果をどのように発表すればよいかなど、経営学研究的の評価をめぐるこれまでとこれからについて、ここで整理しておくことは日本経営学会にとっても意義が大きいように思われます。歴代の日本経営学会賞審査委員長、日本経営学会誌や国際誌の編集責任者などにご登壇を願って、この問題を多くの会員とともに議論する場を設けてはいかがでしょうか。

以上